

技術研究本部の歴史を綴る



# 技術弘報

発行  
技術研究本部 総務部総務課  
〒162-8830  
東京都新宿区市谷本村町5-1  
☎03(3268)3111(代)

## 平成二十五年 年頭の訓示

明けましておめでとうございます。皆様、ご家族共々、健やかに新年を迎えられたことと思います。

私自身、一昨年の八月に本部長に就任して以来、無事に二度目の新年を迎えることができました。これもひとえに

技術研究本部全職員が、責任感と自覚を持って、職務に専念し精励して頂いたおかげであると、心より感謝しております。

さて、平成二十四年を振り返ってみますと、その年をイメージする漢字として「金」が選ばれました。ロンドンオリンピックでの過去最多での「金」獲得、山中伸弥氏のノーベル賞受賞など数々の「金」塔が打ち立てられました。他にも九百三十二年ぶりに全国的に観測された金環日食、自立式電波塔として世界一の高さとなった東京スカイツリーの開業と明るい話題もあった一方、経済状況は世界的に低迷を続け、我が国を取り巻く安全保障環境も、北朝鮮による二度の事実上のミサイル発射や、中国当局所属の航空機

や艦船による領空、領海侵犯等、緊張関係が極めて高まっています。こうした安全保障環境の不安定化の傾向は、世界的に見ても、弱まる兆候は全く無く、防衛省自衛隊の役割は、より一層極めて重要になって行くものと考えられます。

昨年十二月十六日の衆議院議員総選挙によって政権交代が実現し、年末二十六日には新政権による組閣が行われました。平成二十五年度の政府予算案の策定は本年にずれ込むこととなりましたが、予算案の年明け編成は、平成六年度予算以来、十九年ぶりとなります。新政権においては、予算編成に係る指示が发出される可能性があると、大幅な二十五年度暫定予算も視野にいられておかねばなりません。このような状況下、技術研究本部としても、来年度の研究開発事業計画を着実なものとするため、新年当初から、速やかに適切な対応をして行く必要があります。

また、昨年末には、技術研究本部に於いて在籍した幹部陸上自衛官二名が、在籍当時担当した陸上自衛隊新多用途ヘリコプター開発事業に係る「官製談合防止法」違反の罪で、東京簡易裁判所に略式命令請求されると、由々しき事態が生じました。このような事が生じたことは、誠に遺憾であり、これまで、真面目に職務に精励されてきた多数の技術職員が、當々と築き上げてきた国民からの信頼を瞬時に失墜させる行為であると、内局に設置されたUHX事業調査・再発防止検討委員会に全面的に協力しつつ、事実の全貌を解明し、正すべきところは速やかに正し、国民からの信頼を速やかに回復しなければなりません。

一方、技術研究本部は、昨年十一月には、創立六十周年記念の諸行事をとおこりな挙行することができました。ここに改めて、技術研究本部創設以来、諸先輩方が築かれた歴史と業績に深く敬意を表しますとともに、今回の不祥事案も踏まえ、新たな決意を持って、防衛省自衛隊の一員としてより一層信頼され、頼りにされる技術を目指し、皆様とともに新たな七十年に向けた躍進の礎を築いていきたいと思っております。

そのような中、平成二十三年度から事業を実施してきた、大型開発プロジェクトの次期固定翼哨戒機及び次期輸送機のうち次期固定翼哨戒機は、飛行試験強度試験とも、残り僅かな試験ケースを残すのみとなりました。関係職員が一丸となって遂行してきたプロジェクトが、ようやく信頼される「装備品」を送り出す事ができる最終段階になりました。海上自衛隊の部隊も、多分XP-1の配備を待ち望んでいることと思います。PCのグループ会議は併せて三百回以上と聞いています。研究室・研究所、開発室・開発官、色々なレベルでそれぞれのチームワークが発揮されたことと思っております。現在実施中の各種試験でも数多くの不具合が

発生し、順調に行かない場合が多々あると思っております。しかし、どんな困難な状況に直面しても、決してあきらめことなく、研究所開発官等が丸ごと対応することが必要不可欠だと思っております。

昨年六月には、米国に出張し、ワシントンDC及びオハイオ州デイトン等を訪れ、米国防総省及び陸海空軍の高官の方々と会談し、その際特に、パワー&エネルギー分野についても米側高官と意見交換をする機会を得ました。また、研究所等の若手技官が米国の研究所を訪問する機会も得ました。この成果が日米科学技術者交換プログラムや日米共同研究の発掘などに繋がるといった目に見えない成果が上がってきています。特に、若い方々が、海外の実際の研究開発現場を見ることは、相手への理解が深まるばかりでなく、その後の両国の信頼関係醸成に非常に良い結果をもたらすと考えられ、今後とも積極的に推進して行きたいと思っております。

これらについても踏まえて、平成二十五年においては、我が国の安全保障及び国際社会の安定を図る上で引き続き重要な役割を果たしていく日米間の緊密な連携について、技術研究本部としてもBMDの共同開発等、各種共同研究の一層の推進を図るとともに、さらには、武器輸出三原則の緩和により既に新たな技術協力の対話が始まりつつある、イギリスやオーストラリアについても、真に実りある技術協力関係が築ける年にしたいと考えています。

最後になりましたが、新年を迎え、職員の皆様の大いなる飛躍を期待するとともに、皆様とご家族にとり、平成二十五年が昨年にして良い年であることを祈念いたしまして、年頭の訓示と致します。

平成二十五年一月七日  
防衛省技術研究本部長  
秋山 義孝

## 小野寺防衛大臣

### 技術研究本部(三宿地区及び目黒地区)ご視察



平成二十五年一月二十九日(火)、技術研究本部電子装備研究所・先進技術推進センター及び艦艇装備研究所は、小野寺防衛大臣のご視察を頂きました。

また、防衛省本省からは、鎌田官房長、渡辺技術監が同行されました。

三宿地区においては、本部長以下による出迎えて始まり、本部長からの幹部紹介、概況説明に続き、施設及び研究試作品等をご視察されました。

三宿地区では、電子装備研究所のAIRBOS、二波長赤外線センサ及びミサイル妨害装置、そして壁透過レーダ及び瓦礫下探索レーダの実験をご視察され、研究の内容、研究成果の反映先など熱心に質問をされました。

先進技術推進センターでは、シミュレーション統合システム及び統合防空システムシミュレーションをご視察されました。

三宿地区ご視察後すぐに目黒地区に移動され、引き続き本部長からの幹部紹介、概況説明に続き、施設及び研究試作品等をご視察されました。

目黒地区では、艦艇装備研究所の、フローノイズシミュレータ及び大水槽をご視察され、帝国海軍時代からの施設や研究設備に興味をもたれ、また、大水槽では、実際に計測する際の方法について熱心に質問をされました。

先進技術推進センターでは、ロボットシステム技術、先進個人装備システム、生物剤検知技術及び携帯型化学剤検知技術及び多重脅威対処個人防護装備技術をご覧になり、先進個人装備システムを、実際に手に取り、またロボットの操縦も体験し、防護マスクも実際に装着され、呼吸のしやすさを体感されました。

目黒地区、三宿地区それぞれ展示説明に対し、実際に手に取り装着するなどしながら終始熱心に耳を傾けられ「技術には良い技術がある。先進「さい」との大変嬉しい励まし的な研究を今後も頑張ってください」との言葉を頂きました。



# 創立六十周年 記念式典

技術研究本部は、十一月十五日(木)、創立六十周年を迎え、内部局と各研究所等で各種記念行事を行った。

この日、内部部局では記念式典が挙行され、午前十時から大会議室において内部部局職員及び各研究所長等が参列して、秋山本部長の訓示に続き技術表彰第三級賞詞等表彰式が行われた後、午前十一時三十分から株式会社東芝ほか十企業等に対し、幹部職員が陪席して本部長感謝状贈呈式が行われた。(表彰者等は以下のとおりである。)

## 技術表彰

- 第三級賞詞
  - 事業監理部計画官付 防衛技官 荻野 直樹
  - 陸上装備研究所 防衛技官 那須野雄介
  - 電子装備研究所 渡辺 聡
  - 三等空佐 鈴木 祐仁
  - 防衛技官 鈴木 祐仁

## 職務遂行表彰

- 第三級賞詞
  - 事業監理部計画官付 防衛技官 土井 博史



○航空装備研究所 防衛技官 宇田川直彦

なお、職務遂行表彰の第四級賞詞及び第五級賞詞については、同日付で各所属長より伝達された。

第四級賞詞 二十八名  
第五級賞詞 十六名

○先進技術推進センター 防衛技官 大崎 馨

○技術企画部企画課 防衛技官 佐々木克利

○研究開発評価官付 防衛技官 布施 行規

○航空装備研究所 防衛技官 中村 尚

○艦艇装備研究所 防衛技官 枝長 孝幸

○先進技術推進センター 防衛技官 赤木 尚史

○航空装備研究所 防衛技官 倉本 健介

○相模地区自治会 防衛技官 市原 紀生

○自治会法人山王自治会 防衛技官 橋野 世紀

○相模原市中央区役所大野北まちづくりセンター 防衛技官 橋野 世紀

○株式会社オキシテック 防衛技官 中山 久広

○横須賀市東部漁業協同組合 防衛技官 浦賀久比里支所

○株式会社エアロテクノサービス 防衛技官 浦賀久比里支所

○東通村上田代部落会 防衛技官 東通村下田代部落会

○東通村下田代部落会

# 創立60周年 記念ロゴ決定

技術研究本部では創立六十周年記念行事の一環として、技術研究本部のシンボルマークと併用して使用する「ロゴ」を技術職員へ募集した結果、応募総数四十七作品の中から、以下の作品が選ばれ、十一月十五日(木)創立六十周年記念行事において表彰式が行われた。

受賞者については以下のとおりである。

- 優秀賞 研究開発評価官付評価官 防衛技官 工藤 順一
- 「DEFEND OUR FUTURE」
- 陸上装備研究所機動技術研究部動力研究室
- 防衛技官 吉川 毅
- 「LEAD THE DEFENSE TECHNOLOGY」
- 佳作 陸上装備研究所総務課長 防衛事務官 宮崎 康之
- 「both」なげよう技術の輪 FOR THE TEAM「SDF」
- 航空装備研究所航空機技術研究部航空機構造研究室
- 防衛技官 岡崎 智春
- 「技術で守れる未来(あす)がある」



# 平成二十四年度 永年勤続者表彰

技術研究本部は、十一月一日(木)、平成二十四年度永年勤続者表彰を行い、二十九名が受賞した。

受賞者の所属・氏名は以下のとおりである。(写真は本関係表彰者のみ。)

総務部総務課 安瀬 進	技術開発官(航空機担当) 付 中澤 裕
総務部会計課 豊田 正信	技術開発官(航空機担当) 付 小柳 茂
技術企画部企画課 鈴木 利法	技術開発官(航空機担当) 付 伊藤 健
技術企画部技術情報課 久保 浩	技術開発官(航空機担当) 付 本堂 道行
事業監理部計画官付 池田 真也	技術開発官(航空機担当) 付 永友 賢治
技術開発官(陸上担当) 付 鈴木 俊一	技術開発官(航空機担当) 付 矢野公美洋
技術開発官(船舶担当) 付 森山 直樹	技術開発官(航空機担当) 付 岩尾 哲郎
技術開発官(船舶担当) 付 木原 一仁	技術開発官(航空機担当) 付 岩尾 哲郎
技術開発官(船舶担当) 付 井上 勇	技術開発官(航空機担当) 付 岩尾 哲郎

電子装備研究所 土志田 実	先進技術推進センター 清水 俊彦
電子装備研究所 園田 利明	先進技術推進センター 澤枝 洋一
電子装備研究所 渡辺 聡	先進技術推進センター 伊藤 雅一
電子装備研究所 村上 良行	先進技術推進センター 木暮 聡
電子装備研究所 宇野 毅	先進技術推進センター 木暮 聡
艦艇装備研究所 蓬台 治徳	先進技術推進センター 木暮 聡
艦艇装備研究所 小西 則好	先進技術推進センター 木暮 聡
艦艇装備研究所 村上市 良行	先進技術推進センター 木暮 聡
電子装備研究所 村上 良行	先進技術推進センター 木暮 聡

# 航空機用エンジン部品で 日本チタン協会 開発功労賞を受賞

航空装備研究所は「国内開発耐熱チタン合金の航空機エンジン部品への適用・実用化技術の確立」に関して、(株)IHIと共同で一般社団法人日本チタン協会より平成二十四年度開発功労賞を受賞し、その表彰式が平成二十四年十一月十九日に同協会創立六十周年記念大会(於宇土会館)において開催されました。

日本チタン協会によれば、開発功労賞は「チタンを利用した新製品・新商品・新技術を開発し、その功績が顕著と認められる個人、又は法人」が表彰の対象とされています。

航空装備研究所では、航空機用エンジンの高性能化に関する研究を継続して実施しており、今回受賞の対象となった「国内開発チタン合金の国産航空機エンジン部品への適用・実用化技術の確立」はエンジンの軽量化のための技術のひとつになるものである。チタン合金は鉄系の合金やニッケル基合金よりも密度が小さいことから、エンジンを軽量化するために航空機用エンジンの研究・開発の歴史の中で、チタン合金製部品の適用部位を拡大することが行われてきた。特に高温での強度特性に優れた耐熱チタン合金を用いることで、従来ニッケル基合金で製造していた部品を軽量化することが可能となる。

この合金が開発される以前に技術研究本部で研究・開発してきた航空機用エンジンには、海外メーカーが開発したチタン合金が適用されてきた。航空装備研究所では、平成

# 防衛省環境月間における環境川柳の優秀作品に選出

平成二十四年度防衛省環境月間の行事の一環として、防衛省全職員を対象に環境川柳を募集したところ、約三万四千点の応募があり、その中から優秀作品(十一作品)が選出された。技術研究本部職員の内、以下の職員が選出された。



佳作 総務部 総務課 防衛事務官 川原 重耶

太陽光 これから家も 発電所 川原事務官談 「今回、入選するとは思って

いなかったもので、大変驚いております。今回、自宅で太陽光発電を始めたことで、環境に対する意識も一層高まりました。」

三年度から六年度にかけて、航空機用エンジンの主要構成要素である圧縮機の部品の一部に国内開発された耐熱チタン合金を適用するための研究を実施し、その成果は、平成七年度から二十年度にかけて実施した低バイパス比率ターボファンエンジンである実証エンジン(XF5)の研究において、エンジンの圧縮機の回転体部品へ適用された。なお、実証エンジンは、現在、技術研究本部で研究を実施中の「先進技術実証機」に搭載される計画となっている。また、この耐熱チタン合金は次期固定翼戦闘機用エンジン(XF7-10)に適用されている。

# 「防衛技術シンポジウム2012」開催について

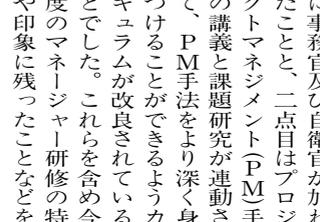
技術研究本部(以下「技術」とい)は、平成二十四年十一月十三日(火)、十四日(水)の二日間、ホテルグランドヒル市ヶ谷において「防衛技術シンポジウム2012」を開催した。本シンポジウムは、例年、技術の創立記念日にあわせ、開催しているものであるが、今年には特に技術創立六十周年を記念して、例年にも増して規模を拡大し、多くの来場者で賑わった。また、国内の大学や独立行政法人及び企業の各研究機関の技術者・研究者にも参加していただき、オールラウンドセッション(特別講演、先端技術セッション、研究開発セッション、シニア・シニア・シニア、展示コーナー、六十周年記念コーナー、シンポジウムガイドツアー)の各会場において多彩な発表や活発な意見交換が行われた。

一日目は、オールラウンドセッションにおいて「六十周年記念オールラウンドセッション」として「研究開発の方向性に係る一考察」と題し秋山本部長が基調講演を行った。続いて「特別講演I」として、科学技術振興機構 研究開発戦略センター長 吉川弘之氏による「科学と社会」という題の講演をいただいた。午後には、同会場において「先端技術セッション」として、防衛の観点から技術として興味のある技術について、大学、独立行政法人及び企業の各研究機関が保有する先端技術として、核物質検知技術、情報処理技術、蓄電池技術に関して、現状と今後の展望について五件の発表が行われた。また、「研究開発セッション」と題し、技術開発官、研究所等から研究開発成果について、「陸上装備バーチャルから実現へ」、「艦艇技術六十周年の足跡」、「大空の防人」として、航空機と誘導武器のこれから、「艦艇・水中武器の技術への挑戦」の四つのセッションで発表があった。

一方、オールラウンドセッション会場以外に設けられたシニア・シニア・シニア、六十周年記念コーナー、展示コーナー、六十周年記念コーナー、及びシンポジウムガイドツアーにも多数の聴講者、見学者が訪れた。シニア・シニア・シニアセッションは、技術の若手技官の発表や、航空自衛隊航空開発実験集団、防衛大学校の研究開発を中心に、ポスター及び短時間の口頭発表を組み合わせて行われ、会場では熱心な質疑が行われた。

展示コーナーでは、技術の研究開発内容を、研究試作品を中心に紹介した。今年度は、東館二階の他、西館前の屋外を借りて出来るだけ多くの展示をしただけでなく、屋内では展示できないような車両の展示や、「先進個人装備システム」の試作品を身に着けた隊員による作戦行動のデモンストラレーションも行い、来場者には好評であった。また、「新アスロック」のような大きな展示品も多かった。また、「新アスロック」のような大きな展示品も多かった。また、「新アスロック」のような大きな展示品も多かった。

展示品の中には、技術の若手技官の発表や、航空自衛隊航空開発実験集団、防衛大学校の研究開発を中心に、ポスター及び短時間の口頭発表を組み合わせて行われ、会場では熱心な質疑が行われた。



## 平成二十四年度 S&TF 技術グループ会議の実施について

平成二十四年十月二十一日(日)〜二十八日(日)の日程で S&TF (Systems and Technology Forum) 技術グループ会議のために陸上装備研究所の小林所長以下各研究所の若手技官、本部技術企画課、内局技術計画官付等のメンバーで米国に出張しました。

この出張は、将来の日米共同事業や人材交流などの可能性について討議するため各研究所の若手技官を訪問させ、米軍の研究機関の施設見学や担当者とのディスカッション等を通じて今後の日米間の技術協力推進を図るべく実施したものです。

今回訪問した米軍の研究機関は、訪問順に米陸軍通信電子研究開発技術センター、米海軍航空システム司令部、米陸軍試験・評価司令部、米海軍水上戦センター、米陸軍ネイティック兵士研究開発技術センターの五ヶ所です。今回はこれらに米陸軍協会主催の AUSA 2012 の見学とマサチューセッツ工科大学・ガスタービン研究所の訪問も実施しました。

各訪問先では相互に研究所紹介と研究内容の概要説明を行ったのち、施設見学や今後の協力についての意見交換を行いました。

米陸軍通信電子研究開発技術センターでは技術情報交換や研究協力に関する議論を行ったほか、現在 ESEP 派遣中の岩村技官からは派遣先での研究成果の説明を受けました。岩村技官の研究開発は、今後、学会発表等を通じて公表予定とのことです。米海軍水上戦センターにおいては、現在日米間で調整が進んでいる共同研究に関連した技術的ディスカッションや ESEP の受入についての意見交換を実施しました。ネイティック兵士研究開発技術センターにおいては、共通の興味分野の特定をするとともに、継続的に情報交換を行っていくことで意見が一致しました。なお、これを機に十一月二十日に双方の技術者による第一回目の電話会議が行われました。また、AUSA 2012 の会場では短時間ながらキース・ウェブスター陸軍次官補代理との面談も実施しました。S&TF の一環として実施する若手技官中心の米国訪問は今回で三回目ですが、今回は二十四年六月の本部長の訪米を受けて将来の新規共同事業の開拓や情報交換、人材交流の拡大を行うべく調整を進めました。訪問先では今後の技術交流や ESEP による人材交流などの内容について具体的な議論を行うことができ、単なる施設見学や意見交換にとどまらない、充実した出張とすることができました。また、今回の訪問を通じて米軍の研究開発の現場を直接見学し、技術者同士の議論できたことで、米軍の研究開発の水準を知り、身近に感じることができました。

米側からは今後このような技術交流を促進するための訪問を歓迎する旨の発言がありました。

今回の訪米に際しては、米側受入機関はもとより、技術内の多方面からのご支援をいただきありがとうございました。この場をお借りして深く御礼申し上げます。

紹介したいと思います。今年度の変更点の一点目については、事務官及び自衛官の方と一緒に研修を受けられたおかげで、多角的な視点でモノを見る重要性を教えられたように思いました。事務官の方は人事・会計など技官が配属される部署に勤務し、多種多様な経験を積んでいるので、グループワーク等を通じて技官とは異なる観点から意見を頂き随分参考となりました。また、自衛官の方からは特に課題研究において装甲戦闘車についての情報や今後望まれる装備など、課題研究に取りかかる一里塚を与えて頂くとともに内容の進展に合わせてご意見を頂戴し、課題研究の深堀に役立ちました。私からみてこのようなメリッとはあるものの、今後本研修に事務官及び自衛官から継続的に参加して頂き、それを根付かせるためには、参加される方に対して何かキャリアの認定となるものを提供しなければいけないのではないかと考えました。

二点目については、当初私は座学が多く退屈なイメージを持っていましたが、実際に参加してみるとただ聴くだけの座学でなく、聴いた内容に因んだ演習やグループワーク

とセットとなっていたり、PM に関する講義では宿題や課題研究への適用が課せられていました。そのため、しっかりと話を聞いてこまめにメモを取らなければならないと感じました。想像した以上に実践的な内容が多く、特に PM 手法などはそのまますぐに役立てられるわけがありませんが、今までの業務の効率やリスク対応などを振り返る良い機会となり、今後の業務計画を立てる上で参考となりました。

いろいろ工夫を凝らされた講義の中で一番印象に残ったのは、横原艦艇整備研究所長による「ユーザを見据えた研究開発」の講義でした。講義の中で言われた「ユーザである自衛官一人一人のことを考えて技術研究開発を行っているか」という問いは心にこたえました。所長自身その問いに自問自答しながら業務に打ち込んでいく旨言われていたが、私もその問いには今後何度も自問自答をしながら、業務に取り組むたいと思えました。

一方で新鮮だったのは、松崎先生のライカビリティの講義の中で、仕事に対する意欲を失っている部下の不満を聞き出し、彼の感情に触れる言

は今回で三回目ですが、今回は二十四年六月の本部長の訪米を受けて将来の新規共同事業の開拓や情報交換、人材交流の拡大を行うべく調整を進めました。訪問先では今後の技術交流や ESEP による人材交流などの内容について具体的な議論を行うことができ、単なる施設見学や意見交換にとどまらない、充実した出張とすることができました。また、今回の訪問を通じて米軍の研究開発の現場を直接見学し、技術者同士の議論できたことで、米軍の研究開発の水準を知り、身近に感じることができました。

米側からは今後このような技術交流を促進するための訪問を歓迎する旨の発言がありました。

今回の訪米に際しては、米側受入機関はもとより、技術内の多方面からのご支援をいただきありがとうございました。この場をお借りして深く御礼申し上げます。

ミレニウム統合システム (SIMTO) の講義及び演習は、研修の後半で一日やっただけで、課題研究で SIMTO の使用も義務付けられませんでした。しかし、来年度は研修の早い時期に SIMTO の講義及び演習が行われ、課題研究での使用も義務付けられる可能性があります。早いうちに先進センターが行っている SIMTO 講習会への参加と SIMTO の操作手順マスターをお勧めします。

最後に、渡邊研修指導官及び松浦研修指導官をはじめ本研修実施にあたりご尽力頂きました関係各位にお礼を申し上げますとともに、各研修生が各研究開発事業の中核になつていくのにも関わらず快く研修に送り出して頂いた関係各位に深く感謝致します。

## 平成24年度 マネージャー研修を終えて

平成二十四年度マネージャー研修は十月十六日から十一月三十日にかけて主として E2 棟二階にある研修室で行われました。今年度のマネージャー研修は昨年度までのそれと大きく異なっている点が二点ありました。一点目は研修生に事務官及び自衛官が加わったこと、二点目はプロジェクトマネジメント (PM) 手法の講義と課題研究が連動させられることができるようカリキュラムが改良されていることでした。これらを含め今年度のマネージャー研修の特徴や印象に残ったことなどを

紹介したいと思います。今年度の変更点の一点目については、事務官及び自衛官の方と一緒に研修を受けられたおかげで、多角的な視点でモノを見る重要性を教えられたように思いました。事務官の方は人事・会計など技官が配属される部署に勤務し、多種多様な経験を積んでいるので、グループワーク等を通じて技官とは異なる観点から意見を頂き随分参考となりました。また、自衛官の方からは特に課題研究において装甲戦闘車についての情報や今後望まれる装備など、課題研究に取りかかる一里塚を与えて頂くとともに内容の進展に合わせてご意見を頂戴し、課題研究の深堀に役立ちました。私からみてこのようなメリッとはあるものの、今後本研修に事務官及び自衛官から継続的に参加して頂き、それを根付かせるためには、参加される方に対して何かキャリアの認定となるものを提供しなければいけないのではないかと考えました。

二点目については、当初私は座学が多く退屈なイメージを持っていましたが、実際に参加してみるとただ聴くだけの座学でなく、聴いた内容に因んだ演習やグループワーク

とセットとなっていたり、PM に関する講義では宿題や課題研究への適用が課せられていました。そのため、しっかりと話を聞いてこまめにメモを取らなければならないと感じました。想像した以上に実践的な内容が多く、特に PM 手法などはそのまますぐに役立てられるわけがありませんが、今までの業務の効率やリスク対応などを振り返る良い機会となり、今後の業務計画を立てる上で参考となりました。

いろいろ工夫を凝らされた講義の中で一番印象に残ったのは、横原艦艇整備研究所長による「ユーザを見据えた研究開発」の講義でした。講義の中で言われた「ユーザである自衛官一人一人のことを考えて技術研究開発を行っているか」という問いは心にこたえました。所長自身その問いに自問自答しながら業務に打ち込んでいく旨言われていたが、私もその問いには今後何度も自問自答をしながら、業務に取り組むたいと思えました。

一方で新鮮だったのは、松崎先生のライカビリティの講義の中で、仕事に対する意欲を失っている部下の不満を聞き出し、彼の感情に触れる言

は今回で三回目ですが、今回は二十四年六月の本部長の訪米を受けて将来の新規共同事業の開拓や情報交換、人材交流の拡大を行うべく調整を進めました。訪問先では今後の技術交流や ESEP による人材交流などの内容について具体的な議論を行うことができ、単なる施設見学や意見交換にとどまらない、充実した出張とすることができました。また、今回の訪問を通じて米軍の研究開発の現場を直接見学し、技術者同士の議論できたことで、米軍の研究開発の水準を知り、身近に感じることができました。

米側からは今後このような技術交流を促進するための訪問を歓迎する旨の発言がありました。

今回の訪米に際しては、米側受入機関はもとより、技術内の多方面からのご支援をいただきありがとうございました。この場をお借りして深く御礼申し上げます。

ミレニウム統合システム (SIMTO) の講義及び演習は、研修の後半で一日やっただけで、課題研究で SIMTO の使用も義務付けられませんでした。しかし、来年度は研修の早い時期に SIMTO の講義及び演習が行われ、課題研究での使用も義務付けられる可能性があります。早いうちに先進センターが行っている SIMTO 講習会への参加と SIMTO の操作手順マスターをお勧めします。

最後に、渡邊研修指導官及び松浦研修指導官をはじめ本研修実施にあたりご尽力頂きました関係各位にお礼を申し上げますとともに、各研修生が各研究開発事業の中核になつていくのにも関わらず快く研修に送り出して頂いた関係各位に深く感謝致します。



